



熊本地震で地割れが生じた水田(2016年4月撮影)



復旧工事時の様子(2017年2月撮影)

**震災から1年半、
営農再開までの活動を振り返ります**

昨年4月の熊本地震後、サントリーホールディングスは、上益城郡嘉島町に九州熊本工場がある企業として、震災後の熊本の復興に貢献するため、さまざまな支援活動を実施してきました。

熊本地震発生から半年後の2016年10月、公益財団法人くまもと地下水財団と熊本大学との連携で「サントリー 熊本地下水みらいプロジェクト」を始動。震災で被害を受けた、水源涵養のための湛水農地「冬水田んぼ」の復旧に取り組みました。

地割れや上下60センチの地表のスレなどが生じた益城町では、今年1月から「冬水田んぼ」を実施している水田と、隣接する水田約6ヘクタールを含む22ヘクタールの復旧工事をスタート。地割れによる漏水対策や水田傾斜の補正、畦や用水路の補修などを行いました。

復旧終えた「冬水田んぼ」で ファミリーが田植え体験

5月には復旧工事が完了。翌月には水が張られた益城町下陳の水田で田植えイベントを開きました。約40人の親子連れが参加し、泥んこになりながら田植えを楽しみました。

地震直後は、まったく作付けができないところもあったほど、甚大な被害に見舞われた益城町。約1年で、田植えができるまでに復旧した水田を前に、近隣の農家の人たちが感謝の声を聞かれました。



泥だらけになり田植えを楽しむ子どもたち(2017年6月撮影)



生き物が帰ってきた水田 有機減農薬農業を支援

6月に田植えを行った水田も、夏になると青々と稲が波打ち、地震前と変わらない風景に、有機減農薬で育てた田んぼや、その周辺にはアマガエルやトンボ、クモなどさまざまな生き物が戻ってきて、豊かな生態系を取り戻しました。

そして10月、待ちに待った米の収穫です。皆で力を合わせて稲刈りに汗を流しました。地震の被害から復旧し、念願の田植え、稲刈りまでを終えた「冬水田んぼ」。その意義と役割を子どもたちに伝えていくことの大切さを、皆で再確認した体験となりました。

「冬水田んぼ」で2年ぶりの収穫を祝う

熊本地震後の復旧・支援が結実

豊かに実り黄金色に染まった水田 念願の収穫に子どもたちも満面の笑み

サントリーホールディングスが、公益財団法人くまもと地下水財団、熊本大学と連携し、熊本の地下水を守るために実施している「サントリー 熊本地下水みらいプロジェクト」プロジェクトを4回に分けて紹介するシリーズ「熊本の水を守る」第3回は、熊本地震から約1年半、稲が色づいた復旧後の「冬水田んぼ」での稲刈りの様子を紹介します。

熊本地震後の復旧が完了し、6月に田植えを終えた「冬水田んぼ」。10月に入り、実りの秋を迎えました。

夏の間、サントリー 熊本地下水みらいプロジェクトと九州大学鳥谷研究室が、病害虫に強い体力のある稲作りに支援。田んぼには、こつこつと垂れる稲穂が豊かに実り、大収穫を期待できそうな予感を漂わせていました。

稲刈りが行われたのは10月14日。集まった親子約30人を前に、益城町の西村博則町長が「今日で、ちょうど震災から1年半。短いようで、とても長かった1年半でした」とあいさつ。「冬水田んぼ」の復旧のおかげで、益城町にも以前の風景が戻りました。今後も、熊本の地下水を守る活動を続けていきたい」と感謝の意を述べました。

サントリーホールディングスのコーポレートコミュニケーション本部 福本ともみ本部長も、「完全な復旧、復興にはまだまだ遠い道のりかもしれませんが、一緒に力を尽くしていきたい」と続けました。

稲刈りは、九州大学鳥谷研究室の指導の下、稲を刈る人と、刈った稲を運ぶ人に別れ、流れ作業で進んでいきました。小学5年の村田鴻明さんは、「田植えの時、あんなに小さかった稲が、自分の身長半分くらいに伸びていてビックリしました」と手際よく稲を刈っていました。

木下紗良ちゃん(6)は、弟の裕翔君(3)に育った稲を見せながら、「お米がココに入っているんだよと、仲良く観察していました」。普段食べているお米がどんなふうに育ったのかわかるようになったよう



収穫に笑顔がこぼれる、サントリーホールディングスの福本ともみ本部長と西村博則町長

です。とお母さんの今日子さんも目を細めていました。

約1時間半で、稲刈りは終了。今度は、干した稲を脱穀し、農法の違いによってどのくらい味に変化があるのか、食べ比べをする予定もあるそうです。

稲刈りが終わった田んぼには、11月から来年度の田植えの季節まで、熊本の豊かな地下水を守る、地下水涵養のために水が張られます。



稲刈りイベントに参加したメンバー



「たくさん！」



上手に鎌を使い稲を刈る子どもたち



「がんばったよ！」

